岡豊風月

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第88号 2014年12月1日

神前結婚式の写真　四万十町　昭和62年撮影

資料見聞

神前結婚式の写真

田辺寿男の民俗写真より

結婚式を終えて、花嫁一行が熊野神社の石段を下りてゆきます。撮影者は民俗写真家の田辺寿男さんです。

花婿は花嫁を気遣い、その手をしっかり握っています。花嫁は、幸せを一身にまとっているかのように輝いています。

時代によって結婚式は移り変わりました。かつては家で行なわれ、手伝いに来てくれた人をもてなす宴を含めて三日続いたという古老の話もあります。風呂敷ひとつで嫁入りしたという女性もいました。田辺さんは、障子や襖を取り払い、皿鉢を並べて家で行なった婚礼の宴や、近所にお嫁さんを紹介して廻る「嫁触れ」など今では見られなくなった貴重な婚姻習俗を記録しています。また、一時期流行した公民館での結婚式も撮影しています。

ところで、上の写真で装っているのは、花嫁ばかりではありません。よだれ掛けなどで飾られた狛犬がみえます。田辺さんは別のコマで、この狛犬をクローズアップしています。レンズの向こうで田辺さんは、狛犬を奉納物で飾った人の、喜びや悲しみにも寄り添おうとしたのでしょうか。（中村）

企画展

田辺寿男の民俗写真4 たましいの四季

会期 平成27年1月2日（金）～3月22日（日）

中村 淳子

民俗写真家・田辺寿男氏（1921～2010）の写真展第4弾を開催します。当館は、平成18年に田辺氏からご寄贈いただいた写真資料約5万点を所蔵しており、その一部を不定期に写真展などで紹介しています。今回は「人の一生」を田辺氏の写真でたどります。

さかのぼること平成23年、第3弾の写真展『土佐を撮る』を追悼展として開催しました。

同展は、田辺氏のオリジナルプリントをできるだけ多く紹介することが主眼だったので、バラエティーに富む構成にしました。「つどう」「はたらく」「つくる」「あそぶ」「まつる」「いのる」の6章に、受賞作品やはじめての個展「仁淀村と無形文化財」、最後の個展「ぼくの村は山をおりた」の章を加え、田辺氏の仕事の概略を見通すものとしました。

しかし、田辺氏の写真集『海辺』や『山間』（いずれも高知市立市民図書館刊行）、写真展『ぼくの村は山をおりた』や『いのちの河くらしの川』（いずれも当館刊行）のように、何かひとつのテーマで写真群を構成したものとは違って、断片の集積に終わったことも否めません。

そのため、第4弾の写真展で目指したのは、「ひとつのテーマによる構成」でした。当初は、海（『海辺』）・山（『山間』）・川（『いのちの河くらしの川』）ときたからには、次のテーマは「町」だろうと考えました。平成9年の『岡豊風日』のインタビューで、「『河川』の次に写真集をつくるとしたら、町の人々の暮らしをとり上げたい」と、ご本人もおっしゃっていました。

しかし、「町」は難しそうでした。田辺氏はテーマを決めたら、それに沿った新たな撮影も行なって、充実した写真集・写真展をつくってきました。田辺氏は「町」も精力的に撮影するつもりだったと思います。けれど、撮影にかかる前に病に倒れられました。

加えて、田辺氏が会長を務めていた建依別写壇の会員だった武吉孝夫氏が昨年から今年にかけて刊行した写真集『昭和51年・高知市を歩く』全8巻以上の、「町」の写真記録、写真表現は不可能だと思えました。

そこで、テーマを空間から時間にずらしてみようと考えました。一日、一年、十年一昔など時間にもいろいろありますが、まずは、「人の一生」をテーマとした写真展を試みることにしました。

田辺氏は人生儀礼の様子をたくさん撮影しています。また、何気ない日常の写真にも人生が感じられます。

心がけたのは、「ひとりで選ばない」ということでした。館内では、田辺氏

撮影中の田辺寿男氏　四万十町志和にて
昭和51年6月13日　武吉孝夫氏撮影

写真同人「現」で写真選択　当館では田辺氏のモノクロネガのデジタルデータ化を進めている。そのデータ画像をコピー紙に出力して選んでいった。　平成26年9月13日　岡本徹男氏撮影

高知市御畳瀬　昭和40年

えんこう祭　南国市

大蛮に抱かれて氏子入り　津野町

高知市上本宮町

葬具に船を描く　黒潮町

の写真を分類整理している職員と選び、その後で写真同人「現」の例会に持って行きました。

そこでは、持参した写真の半分が没になるなど、厳しい批評眼にさらされました。写真同人「現」は、田辺氏とともに建依別写壇にいた小林勝利氏や武吉孝夫氏を主要メンバーとしたクラブであり、田辺氏ならではの魅力にあふれた写真が選び抜かれました。

選ばれた写真は、武吉氏によって一枚一枚手焼きされました。デジタル全盛時代にあっても、手焼きの魅力は尽きません。デジタルとは趣が異なる白と黒の階調をご覧いただきたいと思います。

なお、同クラブでは、展示や写真集の構成についても議論しました。「物語必要論」や「文学的写真論」、「起承転結の順当な構成など面白くない」、「人生にハレの日はわずかだろう」などの議論が続きました。その果てに、『たましいの四季』というタイトルにこめた思いが、うまくはまった構成がうまれました。

今回の田辺氏の写真展は、「人生とは何だ」と、大上段に構えることなく、ふと立ち止まって私たちがいつか来た道、やがて行く道「人生」を思う――「時間」をめぐる、そんな写真展です。

インタビュー 田辺寿男の写真を語る

小林勝利さん

小林勝利さんは、昭和17年（1942）高知市生まれ。28歳の頃から写真をはじめ、33歳から2年間、仕事のかたわら東京綜合写真専門学校で学ばれました。高知へ帰った後は、田辺寿男さんが会長を務めた建依別写壇に所属。一昨年は写真集『仁淀川遡行』を出版され、昨年は第19回土門拳文化賞を受賞されました。

現在は写真同人『現』に所属し、鏡川をテーマに撮影されています。

小林さんに、田辺さんの写真の魅力を語っていただきました。

小林　勝利さん

写真にみる日常性

東京の写真学校に通っていた頃、私は週末になると都内のあちこちで開かれる写真展を見てまわっていました。

高知へ帰ってくると、写真展へ行く機会は少なくなりましたが、たまたま「建依別写壇」のクラブ展を見に行き、その中にあった田辺さんの写真をみてクラブに入ったんです。安芸市の尾川川の盆行事の写真と、川に牛がいるほほえましい情景の写真でした（写真集『いのちの河くらしの川』掲載）。盆行事や牛に、日常性がとらえられていました。コンテスト写真とは別種の、東京で勉強してきた「日常の写真」が、そこにありました。

そのときの写真展では、他の方の写真を覚えていないんですよ。建依別写壇は全国に名をとどろかせていたアマチュア写真家集団でしたから、すごい写真を撮る方は他に何人もいたんですが、私にとって田辺さんは、特別な存在に見えました。

それは、田辺さんが民俗学をやっていたからでしょう。民俗学には、人間の生きていく術が含まれていますね。だから写真学校に行かなくても日常性が田辺さんにはわかっていたんだと思います。

過疎をテーマに撮る

私の撮る写真は過疎がテーマでした。建依別写壇では、「過疎はもうこれまでにいろんな人にやり尽くされているやないかえ、今頃そんなもん撮って何になるが」などと酷評されることもありましたよ。

けれど、田辺さんは、NHKの正月番組「新春四話」（昭和58年（1983）1月7日放送）に私を推薦してくれました。四国各県からひとりずつ出演する番組でテレビとラジオの両方で放送されました。

撮り始めてまだ3年たったくらいで見通しも立ってなかったのですが、春夏秋冬の季節感を見せる形、過疎の集落の記録写真を65枚ほど選びました。これが、一昨年に出した写真集『仁淀川遡行』の原型になりました。

ただ、私の通っていたところは過疎といっても田辺さんが通っていた白髪や板淵ほど深刻でなく、まだまだ子どももいて悲壮感はありませんでした。

田辺さんは写真集『ぼくの村は山をおりた』を40代で撮ってるでしょう。こういう写真は今の70代の私には撮れないと思うんです。かなりのエネルギーがなくてはとても撮れませんよ。この頃の田辺さんは若かったし、写真をやりはじめて20年も30年もたってないでしょう。だから、撮りに行くのが面白かったのだろうと思います。

けれど、撮っているのは家屋の解体とか、墓おろしとか悲壮なものです。

墓を掘って骸骨の出てくる写真など、田辺さんに民俗学の基礎がちゃんとあったからこそ撮れたのでしょう。行事にしても、人間の暮らしに必要な部分であると思っているからこそ、撮れたんじゃないかと思います。

鰹節をつくる　昭和40年代
田辺寿男氏撮影・小林勝利氏談（5頁も同様）
「ここには悲壮感はないね。おばあちゃんは鰹節を楽しげに作り、かたわらにはトロ箱に入った鰹節が写っている。工場の中で子どもが三輪車で遊ぶ。豊かな暮らしが見えるねえ。人生にとって幸せとは何かとは、まさしくこういう和やかな空間の中に見える気がする。多くの人がこういう作業で生活できた昔の暮らしを私たちは忘れつつある。現代ではみられなくなってきた光景だ。それがここに写っている。」

白髪小学校の校長先生だった岡村さんが私の勤め先へ再就職されたので、しばらくご一緒したんですよ。あるとき「小林さんは写真をやりゆういうが、田辺さんを知っちゅうかね。田辺さんは私の学校へよく来てくれよったよ」と、なつかしそうに話してくれました。

その頃の写真を、『ぼくの村は山をおりた』という本になるまで私たちは見たことがありませんでした。

以前、写真家の江成常夫先生が高知の取材に来たことがありました。そのとき先生は、「人間の幸せの原点は何か。これを絶えず考えて撮っていったら見えてくるものがあるのではないですか」とおっしゃいました。あの本の写真を見ていると、田辺さんも「人間の幸せとは何か」ということを見つめていたんじゃないかと思います。

盆行事　吾川郡仁淀川町（旧・池川町）　昭和35年頃
「こういう光景を見たことがないから、ろうそくの数に圧倒される。こんな行事があるんだなと田辺さんに教えてもらったという感じだ。ろうそくの数を見せるように撮っている。お尻が見えてるのがかえっていい。こっちを向いて座っていたら出来過ぎで面白くない。絞りをあけて、シャッタースピードを遅くして、ストロボを使ってないところに良さがある。手前がよくボケて、後ろはそこそこボケて、総じてバランスがいい。」

下手な写真、だからいい

田辺さんは絵作りが下手ですね。絵作りをしてないから面白いんじゃないでしょうか。

報道カメラマンはまわりの状況をみて、きっちり撮ろうとします。きっちり撮ると報道写真としてはいいですが、写真としては面白さや余韻がなくなります。

一方、写真家には絵作りをする人と絵作りをしたら個性が出ないと思う人がいます。『昭和51年を歩く・高知市』のシリーズを著した武吉孝夫さんや私は後者です。他の人と同じになるのは嫌でね。はずれたところを目指すんです。田辺さんもそうだったろうと思いますよ。

きっちり撮る人は、きちんと枠の中に納まったきれいな写真を作ります。けれど、田辺さんは普通なら切らないようなところでフレームを切っています。人の頭や体の途中で切っていることさえあるのですが、枠の外に続いているように見える効果があります。枠の中からあふれるような、広がりのある写真になっています。

巳正月　土佐清水市下ノ加江　昭和52年
「夜、お墓で餅投げというのは、非日常で面白いですね。光がないからフラッシュをたかざるをえない。しかもその方が夜やる行事ということがわかる。人の顔もわかり、場所がお墓だけど神妙な顔ではない。餅拾いは、どこでやっても楽しいものですね。田辺さんは民俗学をやってるからこういう行事に気がつき、目が向くのだろう。田辺さんが撮っていなければ、知らないまま、写真記録にも残らないまま消えていくものが多々あったと思う。」

田辺さんの写真は、ダイナミックでパンチ力のある下手な写真なんです。何ともいえない余韻があるんですよ。

写真による民俗の記録

建依別写壇では毎月、例会があり、そのあとは飲み会が恒例になっていました。行きつけの飲み屋では民俗仲間の坂本正夫先生が田辺さんを待っていました。楽しい酒をご一緒しましたよ。

1回だけ田辺さんと撮影に行きました。もっと一緒に撮りに行く機会があったら、私も違った写真が撮れていたかもしれないとも思います。

田辺さんが会社勤めをしていたら、それほど多くの写真は撮れなかったかもしれません。自転車店経営で自由がきいたのが良かったですね。民俗行事は土日にあるとは限りませんから。

田辺さんの写真には、民俗学的な知識がないと撮れない写真がたくさんあります。華やかな祭りの写真は残っても、小さな行事や日常の伝承は残りにくく、田辺さんだからこそ残せた写真は本当に貴重ですね。

そういった意味でも田辺さんの写真に目を向けた歴民館はすごいと思います。4回目の写真展『たましいの四季』にも期待しています。（聞き手　中村）

考古　田辺寿男氏の民俗写真から
―改葬のすがた―

奥村隆彦氏が『葬墓民俗用語集』（歴史考古学叢書第1巻　平成26年2月）を刊行されました。その中で氏は、近年において家族葬が増え葬儀が簡素化していることを指摘しています。さらに葬墓の用語も死語化してきています。核家族化や経済的な問題から墓の改葬もみられるようになりました。昭和55年（1980）に伊野町（現・いの町）と土佐市を結ぶ県道39号線の道路拡張に伴う改葬が土佐市吹越で行なわれました。小山に営まれていた江戸時代から近代の墓地で、改葬の見学と調査の許可を頂き、2～3日の調査を実施しました。山の岩盤に墓穴を掘っているため、表面からも土坑墓の様子がみてとれました。埋納品には、盃や煙管、箸、人形がありました。掘り出された人骨は、真っ白いのですが、空気に触れると一瞬で茶色に変化したのを覚えています。当時は白黒フィルムで記録をとりました。田辺寿男氏の民俗写真に山村での改葬の様子が記録されています。髪の毛が残る頭骨を持ち上げる男性の一瞬の姿が捉えられています。この写真をみると、土葬墓の改葬が身内で行なわれていたこと、墓地での人々の息づかいが伝わってきます。考古学的にも貴重な写真となるでしょう。

（岡本）

田辺寿男「この叔父は賢い人ぢゃった」（板淵）
（『ぼくの村は山をおりた』より）

歴史　連歌の会へのこだわり

高知・岡山文化交流事業の最後を飾る特別展として開催された「長宗我部氏と宇喜多氏」。第2章の「戦国大名家の教養」コーナーで、土佐神社蔵の能面の迫力に魅了された方も多かったことでしょう。能の他に、元親が和歌や連歌を好んだこともご紹介していましたが、そのなかに一通の書状があったことご記憶にありますか？

この史料は、元親が幡多郡入野の家臣曽根十兵衛に宛てたもので、連歌の会を催すにあたり、大切な「発句（ほっく）」を募集していたところ、いまだ返答が無いことに対する催促の手紙です。元親が家の吉例として毎年2月初めの吉日に、歌詠みを集って千句の興行を催していたことは「元親記」などに記されています。しかし、元親自身の手紙によって連歌会興行の事実をとらえることは大変貴重ですし、何より師範蜷川道標（にながわどうひょう）を筆頭に、細川、十市、久礼田といった重臣層のみならず、一家臣である十兵衛にも同様の誘いをかけていたことには注目されます。

文芸の世界には身分差は関係なかったのかもしれません。

（野本）

長宗我部元親書状
無年号2月8日付　曽根十兵衛宛
当館蔵
花押の形状からみて元亀～天正初期頃と考えられる。

民俗　中脇初枝著『みなそこ』

中村（現四万十市）で高校まで過ごした小説家の中脇初枝さんが新著『みなそこ』を刊行されました。中脇さんは『きみはいい子』『わたしをみつけて』など社会的な問題を扱った作品が評判を呼び、高知県立文学館でも企画展が開催されました。中脇さんは大学で学んだ民俗学にも大きな関心をもたれており、昔話の絵本や再話した本を出されています。これまでも『祈祷師の娘』など民俗学の成果を活かした作品を書かれていますが、『みなそこ』は、四万十市の旧西土佐村が舞台のモデルらしく、川の風景や民俗がふんだんに登場します。私も知らなかった盆行事なども出てきて、興奮モノです。あ、でも本筋は恋愛小説です。結構意外な展開でびっくりしました。おっと、あとは読んでのお楽しみです！

（梅野）

『みなそこ』中脇初枝著　新潮社
原題は「川にすむ神は水にくすぐられてわらう」

れきみんニュース

遍路展 四国霊場開創1200年 空海の足音 四国へんろ展

四県連携事業として開催されました「四国霊場開創1200年 空海の足音 四国へんろ」展は、高知県立美術館を最初の会場として始まり、愛媛県美術館、香川県立ミュージアム、徳島県立博物館会場で公開されました。高知県立美術館では、高知県・(公財)高知県文化財団・高知新聞社・RKC高知放送を主催とし、高知県立歴史民俗資料館が企画・運営をしました。

作品のご所蔵者の方々や四国八十八ヶ所霊場会、同土佐部会の多大な協力を頂き開催することができました。心よりお礼申し上げます。

展示会には関東を始め県内外方から多数の方が訪れ、入館者は13572人となりました。初めて四県の博物館・美術館が連携した事業です。

(岡本)

荒神神楽といざなぎ流

7月23日から千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館で、香美市物部町のいざなぎ流を取り上げた特集展示「中国・四国地方の荒神信仰―いざなぎ流・比婆荒神神楽―」が開催中です。広島県の比婆荒神神楽の資料とともに、いざなぎ流の仮面、御幣や帳面などが並んでいます。関連して、11月29日(土)・30日(日)の2日間、「荒神神楽といざなぎ流」と題し、いざなぎ流と比婆荒神神楽の記録映像を同館で上映、30日13～17時には展示を担当した松尾恒一先生をはじめ、山本ひろ子先生、井上隆弘先生、梅野の4人が、西日本や伊豆諸島の神楽の荒神について研究発表を行ないます(先着50名、要申込、問い合わせは当館に)。

(梅野)

荒神信仰チラシ

博物館実習生を受け入れました

今年度は3大学3名の博物館実習生を8月24日～8月31日に受け入れました。例年の実習とは違って、今年は当館が企画・運営を行なった「空海の足音 四国へんろ展」を高知県立美術館で開催中でしたので、1日半は美術館での実習となりました。報道機関対応の学芸員の様子も見学していただきました。

資料の取り扱い、展示・保存環境、危機管理など多くのカリキュラムをこなしながらも、8月30日はワクワクワーク「琥珀(こはく)で勾玉をつくろう」に補助スタッフとして加わり、準備から始まって、道具・体験学習室の片付けまで担当しました。勾玉の説明では、総合展示室に展示されている勾玉について、子どもたち向けの解説にも挑戦しました。解説を行うことによって観覧者の目線も意識しなければならないことに気づき、資料への関心の引きつけ方や話し方などについて、実習生たちから反省の意見も出ました。

(曽我)

勾玉の解説をする実習生

民家の甲子園

高校生の写真コンテスト「民家の甲子園」は、日本各地の古民家の保存や伝統技術の大切さを広く知らせるため平成14年にはじまりました。当館は、平成24年から高知県大会の会場になっています。今年の高知県大会は6月21日に開かれ、10校14チームが参加しました。各チームは、大会テーマ「継(つぐ)」に沿って撮った民家や町並みの写真を上映し、その魅力をプレゼンテーションして競い合いました。

敢闘賞は高知農業高校Aチームと清水高校、審査員特別賞は小津高校、チームワーク賞は高知農業Bチームが受賞しました。優勝は昨年に引き続き、安芸桜ヶ丘高校でした。

同校は、安芸市や安田町の民家や石塀、桶屋を写真で紹介し、「手間をかければ、必ず、それは何かの形で返ってくる」と語りかけるなど、優れた発表で会場を魅了しました。その後、同校は愛媛県の内子座で開かれた全国大会に進出し、民家大賞(文部科学大臣賞)に輝きました。

(中村)

安芸桜ヶ丘高校の発表

刊行物のご案内

『企画展　田辺寿男の民俗写真４ たましいの四季』

田辺寿男の写真集。モノクロ写真約120点で高知県の人生儀礼などの民俗を活写。巻末に武吉孝夫「フィルムからみた田辺寿男の写真観」収録。
Ａ４変型版　160頁予定
価格未定

高知・岡山文化交流事業Ⅲ
『特別展　長宗我部氏と宇喜多氏
―天下人に翻弄された戦国大名―』

ともに関ヶ原の戦いで敗北し、歴史の表舞台から消えていった戦国大名２氏の足跡を、豊富な新史料などによってたどる展示解説図録。好評発売中。
Ａ４版　112頁
1500円　送料350円

四国霊場開創1200年記念
『特別展　空海の足音　四国へんろ展　高知編』

四国霊場開創1200年を記念して四国へんろをテーマとして四国四県がそれぞれ独自の視点で開催した特別展の高知編図録。好評発売中。
Ａ４変型版　240頁
1800円　送料460円

■振込先／口座番号　01600-2-38806
加入者名　高知県立歴史民俗資料館

臨時閉室のお知らせ

平成26年12月8日（月）
～平成27年2月28日（土）

２階長宗我部展示室は特別展「長宗我部氏と宇喜多氏」終了後、上記の期間閉室いたします。

岡豊風日（おこうふうじつ）第88号
平成26年12月1日
編集・発行　（公財）高知県文化財団
高知県立歴史民俗資料館
〒783－0044
南国市岡豊町八幡1099－1
TEL　088（862）2211
FAX　088（862）2110
開館時間　午前9時～午後5時
休館日　年末年始12月27日～1月1日
臨時休館あり
観覧料　通常期［常設展］大人（18才以上）460円・団体（20人以上）360円
［特別展・企画展］常設展示込510円
団体（20人以上）410円
無料：高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（1名）
印刷・川北印刷株式会社

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/
Eメール：rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

平成27年 1月～3月の催し

企画展 田辺寿男の民俗写真4
たましいの四季

2015年1月2日（金）～3月22日（日）

初節供の鯉のぼり（昭和41年）

民俗写真家・田辺寿男の写真展第４弾。日々の暮らしに人生が感じられる写真や人生儀礼のモノクロ写真を約100点展示します。

講座
2月21日（土）14:00～15:00
「暮らしの中の人生儀礼」
当館 学芸専門員　中村淳子
●申込不要・観覧料要

展示室トーク
2月7日（土）・3月7日（土）
いずれも14:00～15:00
当館 担当学芸員
●申込不要・観覧料要

コーナー展 干支の玩具 未

山﨑茂さんのコレクションを中心に全国の羊の郷土玩具を展示

2014年11月22日（土）～2015年1月25日（日）

展示室トーク
1月10日（土）14:00～14:30
●担当学芸員　申込不要

安芸土鈴（高知県）

コーナー展 昔のくらしの道具

2015年1月2日（金）～3月8日（日）

ハガマ、おひつ、アンカ、炭火アイロン、洗濯板…、昭和の香りのする民具たちです。小学校の昔のくらしの授業にもピッタリ！

コーナー展 おひなさま

郷土玩具のおひなさまや大正時代の豪華な内裏雛、昭和時代の段飾り雛などを展示

2015年2月14日（土）～3月15日（日）

展示室トーク
2月28日（土）14:00～14:30
●担当学芸員　申込不要

奈良一刀彫り（奈良県）

予告 来年度企画展
「大坂夏の陣400年 ―長宗我部遺臣それぞれの選択」（仮）

2015年4月29日（水）～6月21日（日）

2015年は大坂夏の陣から数えて400年目となります。当館では、この節目の年に大坂方として戦った、或いは戦わなかった長宗我部氏遺臣それぞれの運命をたどる企画展を開催します。